

”痛み止め”による胃の粘膜障害（胃潰瘍など）

以前から、“痛み止め”（消炎鎮痛・解熱剤・抗炎症剤）が胃の粘膜傷害（胃潰瘍等）を引き起こすことはよく知られていました。風邪薬の中に入っている解熱剤、歯痛止めや頭痛薬、生理痛の薬、関節や筋肉の痛み止め等が同じ仲間の薬剤です。

胃の粘膜ではプロスタグランジン（PG-I2）という物質が胃の粘膜を守っています。一方、痛みのある場所では別の種類のプロスタグランジン（PG-E2 等）が炎症（痛み、腫れ、熱）の原因となっています。鎮痛剤は炎症の原因物質であるPGの生成を抑える働きがありますが、同時に胃を守るPGも減らしてしまうため胃の粘膜障害が起こってしまいます。

薬の量を細かく調節し胃の粘膜を保護する薬と一緒に投与するなどの工夫もされています。プロドラッグといって血液中に吸収されてから有効な成分に変化するような薬も開発されました。座薬のように直接胃の粘膜を刺激しない経路で薬を吸収させる方法もありますが、それでも胃粘膜障害は起こります。炎症部位で悪さをしているPGの方をより選択的に抑える薬剤（COX2阻害剤；ハイペン、モービック、セレコックス等）の開発もされ、胃腸障害が起きにくくなったようですが、起きないわけではありません。COX2阻害薬（コキシブ系）では心筋梗塞などを起こしやすくなるという報告もあります。軟膏、貼り薬の形で使う物は皮膚への刺激を除くと胃腸障害などの副作用は起こさず、鎮痛効果も得られるようです。

鎮痛剤による胃潰瘍の特徴は多発性、難治性で自覚症状に乏しいとされています。頭痛薬や風邪薬を常用するのは危険です。信頼おける医者からの指示を受け正しく薬を使いましょう。やむを得ず鎮痛剤を連用している人は胃の薬を併用し、定期的に内視鏡検査を受けるなどの注意をしながら服用することをおすすめします。



鎮痛剤の服用が原因と思われる幽門前庭部に多発した胃潰瘍（矢印3ヶ所）